

舊約と新約

1

藤井武

創刊號 二九二〇年六月

幸福論 詩篇第一

聖き幸福——極端なる罪の懺悔者——罪に關する現代の沈黙——福音の心
醉者——聖書は個體なるか——末世の希望——身體の復活——日々の勞作——
も空しからず——大なる審判——基督者と神の預定

自然論 羅馬書第八章 一九—三

パウロは自然の感受性を有せざりしか——愛と信仰とに基く自然觀察
——自然と人との連帶關係——置はれたる土——大自然の裏心の聲——處無
の中に希望あり——束縛より自由へ、滅亡より光榮へ——萬物の復興と神
の子の光榮——自然は人を慕ふ——希望的宇宙觀

彼の信仰的立場

人は家にイエスは由に

舊新約聖書に關する著者一己の研究の發表である。爾今毎月一回づゝ刊行を續くるであらう、來るべき者の來らん時まで、又はペンが著者の手より落ちん時まで。願はくはみたま常に彼を導き給はんことを。

幸福論

詩篇第一

惡しき者の謀略はかりごとに歩まず、
罪人の途に立たず、
囁る者の座に坐らぬべは福ひなり。
かゝる人はエホバの法を喜びて、
日も夜も之を思ふ。

「福ひなるかな」の一句を冒頭に出して讀むべきである。人の子イエスがガリラヤの山上初めて天よりの音信を傳へし時も、その題目は「福ひなるかな」であつた。誠に福ひならん事は凡ての人の願ひである。問題はたゞ幸福の内容又は性質如何にある。世の人々が餘りに卑しきものを以て幸福と呼び慣れしが爲に、此語自ら低調を帯びて基督者の耳に甚だ快からぬものとなつた。併しながら卑しき幸福があると共に又聖き貴き美はしき福祉がある。神のその愛する者に與へんと欲し給ふ天

よりの福祉、こは世の所謂幸福とを然その性質を異にする。こは父の大なる愛の賜ものにして我等の靈の深き歡びである。世の所謂幸福を卑めよ斥けよ。斯の如きものは勿論人生の目的ではない。却て之を犠牲とする所に我等の生涯の意義がある。されど眞の聖き幸福を讃へよ慕へよ。愛なる神は之を我等に贈らずしては已み給はない。もし人の側より見て、聖き幸福と雖も之を目的とすべきに非ずといはゞ、少くとも神の側より見て、彼は人生を導きて此處に達せしめん事を己が目的と爲し給ふ。之が爲に彼は永遠に亘りてその心を碎きつゝある。而して彼の或は詩人を以て或は聖子を以て我等をおとづるゝや、先づ此約束を齎らし給うたのである。「福ひなるかな」此一語に我等は父の限なき愛の音信を聴く。福音とは即ち幸福の音信に外ならない。

いかなる人ぞ、眞に福ひなるは？ 世に問題は

多しと雖も、其の解答の難き斯の如きは少いであらう。人は種々なる條件を以て之に充てんとする或は事業の成功を以て、或は自由の獲得を以て、或は人生の解脱を以て、又或は戀の甘みに酔ふを以て。その何れが果して正しいか。不思議なるは多くの人が之等の説に共鳴するに拘らず、現實にその條件を備へし人自身は却て反對の證明を提供する事である。暫く想像を棄て、事實に就て見よ古來何人が眞に福ひなる者として限なき歡喜と感謝との中に其生涯を終つたか。斯の如き人は少數ながらも種かに存在した。併しながらそれは所謂成功者でもなかつた、自由の獲得者でもなかつた、解脱者でも戀人でもなかつた。世の人が福ひなる者として羨望する此種の人々自身は却て言ふべからざる人生の淡さを歎じ堪へがたき苦さを啣ちつゝ逝つたのである。歴山、ナポレオン、ゲーテ、ニーチエ、バイロン、あゝ彼等の生涯も亦無意味で

罪を犯さざらん事を希ふ。汝はわが坐るをも立つをも知り、又遠くよりわが思ひを辨へ給ふ。汝はわが歩むをも臥すをも探り出し、わが諸の途を悉く知り給へり。そはわが舌に一言ありとも、見よエホバよ、汝悉く知り給ふ」(一三九)とあるが如くわが胸のいと小さき思ひもわが舌の一言も罪にのみは觸れざらん事を希ふ。かくて彼の問題とする所はたゞ罪、罪、罪である。事業の蹶頭も健康の毀損も友人の誤解も社會の迫害も彼は多く之を意としないであらう。其他世の人の朝に夕に思ひ煩ひつゝある所のものは一も彼の心を擾すに足りないであらう。併しながら事一度び罪に係るや彼は生命よりも重き問題として之にのぞむ。罪に就ては彼は憚らずして悲しみを泣き且祈る。罪の爲には彼は「夜な／＼涙を流はせ、涙をもてその姿を滌す」のである。「願はくは我を洗ひて雪よりも白からしめ給へ」とは彼が朝毎の切なる祈である。

はなかつた、彼等は如何なる人が福ひでないかを我等に教ふるために身を以てその範を垂れたのである。

人生の福祉の條件は境遇や事功や理知や感情等にあるのではない。然らば何處にあるか。曰く人のたましひの態度に於てある。罪に對し又神に對して靈魂が如何なる態度を取りつゝあるか。此一事によつて我等の全生涯の福祉と否とが定まるのである。

「惡しき者の謀略に歩まず、罪人の途に立たず、嘲ける者の座に坐らず」といふ。少しく言ひ換へて「歩むにも惡者(神に對)の心構へを以てせず、立つにも罪人の途を離れ、坐るにも嘲者(嘲る者)の座を避く」者といはゞ、その意味や、明瞭を加ふるであらう。福ひなる者に著るしき特性がある。之を消極的の半面より見れば、罪に對する極端なる嫌惡である。歩むにも立つにも坐るにも、唯

斯の如き者が福ひであると聞いて、今の人々は嘲り笑ふであらう。誠に現代の悲しむべき一現象は罪に關する沈黙である。何人も改造を叫び社會主義を口にし自由を唱へ解放を主張する。而して何人も最早や罪の問題に携はらない。彼等は事も無げに言ふのである「罪とよ、舊時代の最大迷妄は此一觀念に於てあつた。罪とは不完全に造られし人類の當然の状態ではないか。否寧ろこれ進化の原動力ではないか。然るに人類をして故なく之が道德的責任を自覺せしめんとしたるが如きは理知の蒙昧に乗じたる基督教の獨斷である」と。驚くべき哉。現代の論壇に盛名ある一記者の次の發言の如きも之を代表的思想として見るとが出来る、曰く「今日の識者は全く罪の問題に煩はされない」と(「ア・ソサエツ」)。殊に福音を説くべき講壇上よりすら罪に關する權威ある聲を聞くと甚だ稀なるに至りしは何ぞいふ不祥事であるか。實に痛歎に堪

へない。我等は信ずる、現代生活の上に否むべからざる或る淺薄さは正に此處より發するものである事を。罪の問題に觸れずして人は未だ人生のものに觸れないのである。何となれば人生の最も深き所に儼然として罪なる事實が横はつて居るからである。此根本問題を解決せずして如何に聲高く改造や解放を叫ぶとも、畢竟一種の遊戲に過ぎない。此事に就て我等の言はんと欲する所は盡きないが、茲には唯一事を注意するに止めやう。それは罪の解決なき所に福ひなる人生は絶對に存在しない事これである。人の良心を劫すものにして罪の如きはない。すべての偽らざるたましひは己に

附き纏ふ此の黒き團塊（くろきだんくわい）を持って剩して泣いた。幾多の人がその爲に或は狂はんとした、或は自ら生命を斷つて了つた。併しながら此深刻なる人生のなやみの爲に神の備へ給ひし或る驚くべき途を發見したる者こそ、天地も覆へらむばかりの福祿を経

験して、詩人ならぬ男女の口より限なき讚美の歌が湧き溢れたのである。「福ひなるかな」の一語を眞に己が經驗として發し得るは、たゞ罪を贖はれし者のみの大なる特權である。

「かゝる人はエホバの法を喜びて、日も夜も之を思ふ」。福ひなる者の積極的の半面は茲にある。彼は極端なる罪の嫌惡者であると共にまたエホバの法の心酔者である。エホバの法即ち彼が我等を待ひ給ふの途、之を喜び且喜びて晝も夜も之を思ふ。彼は誠に斯の如くならざるを得ない。罪のなやみとは餘りに甘くして、その心之に醉はざるを得ないのである。わが罪は如何にして取去られしや。わが新らしき生命は如何にして賦與せられしや。わが今の希望は何處より來りしや。罪なき至聖なる者がこの穢れたる罪人、土くれよりも劣る者のために自ら苦みてその生命をさへ棄てしが故に、す

べて之等の事が我にあるのである。而して彼は復び活きかへり今は天にありて尙も限なき愛をもて我等を支へ勵まし慰めつゝある。而して彼はやがて又我等の前に現はれて、我等の身體をさへ聖化し天地萬物までをも改造すべしといふ。彼をまの當り見る日に至りて我等は全く彼に肖たるものとせられんといふ。驚くべき法よ。世に法は多くある。數理の法あり、生物の法あり、經濟の法あり、道徳の法がある。併し乍ら何ものかこのエホバの法に比ぶべきものがあらうか。之はこれ法以上の法である。自然を超越したる奇跡である。人の思ひに過ぐる逆説である。併しながら斯くてこそ眞にめぐみの福音である。若し我等の世を支配するものが二二ヶ四といひ目にて目を償へといふ自然の法則のみなりせば、罪になやめる靈魂は何によりてかその傷を癒さるゝことを得やう。然るに見よ、茲に一の大なる法の在るあり。之に由て緋の如

き罪も雪の如く潔くせられ死も化して生たらしめらる。之に由て人と天然とに關する一切の失望は其理由を喪ひ、宇宙は光明に充ちたるものとなるのである。噫この大なるエホバの法、之を思うて贖はれし者の心は喜びに溢れざるを得ない。之を黄金に比ぶるも、多くの純精金（じゆんしやうきん）に比ぶるも、漏増（ろうぞう）さりて暮ふべく、之を蜜に比ぶるも、蜂の巢の潤澤（じゆんざく）に比ぶるも、漏増さりて甘し。然り之を他の何ものに比ぶるも、漏増さりて暮ふべく喜ぶべきはエホバの法である、福音である、聖書である。彼が如何にして宇宙と人生とを扱ひ給ふかのその大なる法である。

この大なる法を讚美する者は少くない。併しながら之を唯一の喜びとして晝も夜も之を憶ふ者に至ては甚だ稀である。多くの基督者は其信仰の當初にあつては一度びかゝる經驗を有つたのである。然るに年進むにつれて信仰の初戀はその熱を失

ひ福音を讀へざるに非ずと雖も日夜その心に憶ふものは之に非ずして却て世の事たるに至る。かくて基督者とし言へば必ず微温き者たるかを疑はしむ。彼等に對してキリストは言ひ給ふのである。「我は事る汝が冷かならんか熱からんかを願ふ。かく熱きにもあらず、冷かにもあらず、たゞ微温きが故に、我れ汝を我が口より吐出さん」と。福音と微温とは其性質上絶対に兩立しない。口に福音を唱へて微温的生活を營む者は最大の偽善者である。汝福音を讀るか、然らば何故に之に心醉せざる。汝エホバの法を喜ぶか、然らば何故に晝も夜も之を憶はざる。多くの基督者は答へて曰ふであらう「福音は喜ぶべきに相違なきも晝夜之を憶うて他を顧みざるが如きは甚だ偏狹たるを免れない」と。偏狹、斯の如き言を出す者は却て福音の性質に關する自己の無知を告白して居るのではなからうか。エホバの法は永遠より永遠に亘りて人生

と宇宙とに關する一切の根本問題を解決するものである。天地創造の始より新天新地出現の後に至るまで人の靈と體及び天然萬物の如何にして完成せらるゝ乎を啓示するものである。エホバの法は人と世界とをその神に對する關係に於て取扱ひたる最高最大の原則である。而して神に對するの關係を離れては、何ものも存在の理由を有しない。人生のすべての活動はみな此原則の適用たらねばならぬ。哲學者はその哲學を以てエホバの法を解説せよ。科學者はその科學を以てエホバの法を證明せよ。實業家は其の産業を以て神の榮光を揚げよ。政治家はその政策を以て神の聖旨を行へ。詩人よ聲を擧げて大能のみわざを歌へ。婦人よ家庭にありて主のめぐみを讀へよ。すべての基督者よ福音を喜びて晝も夜も之を憶へ。汝の一切の問題をたゞ聖書に従つて解決せよ。我等が日々の小き煩はしき生活も、エホバの法を離れては全くその

意義を失ふのである。

極端なる罪の嫌惡者にして福音の心酔者、斯の如き人が眞に顧みであるといふ。而して事實が之を證明する。パウロ又はアクガステン又はルテラ等は斯の如き人であつた。彼等の前に横はりし最大の問題は罪であつた。彼等は皆之が爲に惱んだ、泣いた、祈つた。併しながら願はれし彼等に溢るゝ歡喜があつた。彼等は恩寵と眞理に充てるエホバの法を上なき喜びとして晝も夜も之を憶うた。彼等に取りて「生くるはキリストの爲め、死ぬるも亦益」であつた。かゝる生活の福祉は知る人ぞ知る。準繩は我爲に樂しき地に落ちたり。うべ我好き副業を得たるかな」とは彼等と同じ籤を引きし純なる基督者のみの發し得る聲である。

かゝる人は水波のほとりに植へし樹
期に至りて實を結び、
葉もまた潤よる如く、
その作すさこみ竹まかせん。

福ひなる者は純なる基督者である。彼等の現世に於ける生活其ものが歡喜と感謝との連続である。現世は彼等基督者に取て患難の時代また戦闘の時代なりと雖も、エホバ彼等と共に在して彼等の爲に敵前にゆたかなる筈を設け給ふが故に、彼等の杯は溢るゝのである。併しながら神がその愛する者に與へ給ふ福祉は此處に止まるであらうか。神は之に依り頼む者をいつ迄も迫害と侮蔑との中に置き給ふであらうか。神は彼等の患難に代へて榮光を戦闘に代へて勝利を與へ給はないであらうか。神は基督者をして如何な意味に於ても缺くることなき満全の福祉に與らしめずして已み給ふであらうか。否、絶對は神の性格である。彼はすべて相對的處置の不徹底に堪へ給はない。彼ももし基督者を福ひならしめんと欲し給ふか、即ち少くとも或る時を期して、彼等の生涯に伴ふ現在の缺陷を悉く充し、彼等をして完全なる成功者たらし

めずんば安んじ給はないのである。神の與へ給ふ基督者の福祉はその生活の全部に於て永遠に亘りてあるべきである。

是に於てか基督者の生活には現世以上更に來世の大なる希望がある。神は彼等の福祉を絶對的ならしめんが爲に、來らんとする永遠の時代を設けて、彼等をして新しき生活を營ましめ給ふのである。「水流のほとりに植えし樹の期に至りて實を結ぶが如し」といふ。かの棕櫚の樹の熱風に曝されつゝも地下深き處ゆたかに生命の水を吸ひて生色常に美はしきものあるのみならず、期に至れば必ず貴き實を結ぶ、之を基督者の生活に譬へていか

「葉もまた凋まざる如し」實は新しき生活の本體である。葉は現在の生活の機關である。水流のほとりに植えし樹は必ず實を結ぶ、而もその葉も亦凋まぬ。基督者は必ず未來の新しき生活に入る而もその現在の生活の機關——その身體——も亦凋まない。此の朽つる者は朽ちぬ者を着、此死ぬる者は死なぬ者を着、^一て今の血氣の體は靈の體に化せられ、かくて來世永遠、生活に入るのである。福ひなる哉、來世に於て我等はたゞ夢幻の世界を彷徨する裸體の靈魂ではない。我等の聖められたる靈は之に適はしき微妙なる體を纏ひ、完成せられし大地に住みて、最も自由なる活動を續くるであらう。即ち靈と體と天然との間に驚くべき調和が實現して、世界はそのまゝに一大音楽と化するであらう。愛する者等互に再び面を合せて美はしき地を踏みつゝ純愛の語を交すであらう。基督者の來世は單純なる靈魂不滅ではない。凋むべき葉もま

來らんとする永遠の世に於ける榮光と勝利との生活である。之を現在に於て直に實現することは出来ない。現在は患難と戦闘との時代である。併しながら水流のほとりに立つ樹は決して此儘にして終らない。やがて期が來る、必ず來る。豊かなる實を結ぶべきその期が必ず來る。「主エホバはすべての面より涙を拭ひ、全地の上よりその民の凌辱を除き給はん」其時に至りて、基督者はまた今日の如く迫害と侮蔑とを忍びながらに主を讚美することなく、キリストと共に榮光と權威とを與へられて全宇宙を支配するであらう。パウロの所謂「キリストと共に世嗣」たるの生活、之れ基督者の結ぶべき實である。水流のほとりの樹はこの貴き實を結ばずしては終らない。たゞ「期に至りて」とある。期！ いかなる期ぞ。曰くキリスト再臨の時である。その時に至りて基督者の福祉は完成する。故に待て、望め、キリスト再臨の時を。

た凋まざること、朽つべき肉體も亦朽ちざるものと化せらるること、身體の復活、身體の榮化、之ありて完全なる生活は初めて可能である。之ありて基督者の福祉は初めて圓滿である。

傳道者は教へて曰うた「汝の糧食を水の上に投げよ。多くの日の後に汝再び之を得ん」と(傳道一の五二六)。詩人は歌うて曰うた「涙と共に播くものは歡喜と共に獲取らん。その人は種を携へ涙を流して出で往けど、禾束をたぐさへ喜びて歸り來らん」と(詩一三六)。我等は言に従ひて糧食を水の上に投げつゝある、涙を流して出で、種を播きつゝある然るに見よ、水上に浮びし糧食は或は流れ或は沈みて空しく影を没するのみ。涙と共に播きし種は何時まで待つも芽を出さない。信仰生活幾十年、近親の情誼と此世の成功とを犠牲にし、すべての有形無形の所有を傾注して愛の行爲に没頭するもその効果たるや誠に言ふに足らぬものである。噫

かくて事は終るのであるか。若し然らばパウロの言ひし如く「我等この世にあり、キリストに頼りて空しき望を懐くに過ぎずば、我等は凡ての人の中にて最も憫むべき者」である。併しながら傳道者の言は明白である、曰く「多くの日の後に汝再び之を得ん」と。詩人の聲は確實である、曰く「その人は禾束を携へ喜びて歸り來らん」と。何れの日ぞ、この喜ぶべき日は？そは現世に於ては無い。キリスト再臨の後である。我等の復活又は榮化の後である。榮光と勝利の永遠的生活に入りし後である。其時に至りて、我等の水上に投げし糧食は必ず再び集めらる、我等の涙と共に播きし種は必ず禾束となつて獲取らる。凡そ現在に於ける主の爲の勞作は、その大小に論なく、かの時に至りて必ず効果を現はすのである。故に曰ふ「その作す所みな榮えん」と。大膽なる提言！而も如何に慰め深き言葉よ。我等のいま主に在りて作す

所、たとへ水泡に歸するが如く見ゆとも、そは必ずみな一の例外もなく、功を奏するのであると。我等が隣人のいと小さき者に給したる一杯の冷水と雖も決して無益には終らないのであると。神は人の知らざる所に於て悉く之を認め之を記憶し必ず其實を結ばしめ給ふのであると。福ひなるかな。斯くてこそ現在の日々の生活に無量の意義がある。斯くてこそすべての勞作に言ふべからざる張合があつてこそすべての勞作に言ふべからざる張合があつてこそすべての勞作に言ふべからざる張合がある。斯くてこそ基督者の眼中に徹底的の樂觀がある。「されば我が愛する兄弟よ、確くして搖くことなく、常に勵みて主の業を務めよ。汝等その勞の主において空しからぬを知らばなり」(前コリント)。

感すべき人は然らず、

風の吹き去る糞糠の如し。

されば感すべき者は審判に堪へず。

感すべき者の前に立つてこそ得ざるなり。

純なる基督者の福祉に對して、感すべき人即ち神

との關係の義しからざる者は如何。世の多數者は實に此範疇に屬する者である。その中には智者あり學者あり、權者あり富者あり、王侯あり將相がある。また他方には多數を恃む平民がある。彼等は相倚り又は相争うて各種の社會組織を形成し若くは社會運動を促進しつゝある。彼等は神を認めざる人類文明の中に幸福を見出さんとするに於て悉く一致して居る。而して不幸にも彼等の目的は或程度まで貫徹し得るものゝ如く見ゆる。彼等はその自ら築き上げし文明の城廓に立て籠りて、神と其僕とを睥睨するの觀がある。たとへ彼等は心の深き所に於て溢るゝ歡喜を経験せざるにせよ、少くとも外側に於ける人生の優勝者は彼等に非ざるかを疑はしむるのである。

併しながらこれ全く人の目に映する「世の子」の姿に過ぎない。神は上より彼等を評して曰ひ給ふ「風の吹き去る糞糠の如し」と。いかに痛烈な

る譬喩よ。神に従はざる者の立場を指摘して之よりも明白ならしむることは出来ない。彼等はその富と地位と智識と勢力とに恃みつゝあるも、生命の源なる神に背きて實は何の基礎をも有せざるもの、さながら丘上の禾束にて扱かる糞糠である。やがて一陳の風吹き來るや忽ち動搖飛散してその落着く所を知らない。見よ世に時めける人の一朝思はざる蹉躓に遭遇するか若くは己が死に床に臨みし時の狼狽と失望とを。その憫むべき状態を目撃する者は、彼等を譬へて「風の吹き去る糞糠の如し」と言へる語の意義の幾分を了解せざるを得ない。

さはれ此意義の十分なる發現も亦現在に於てあるのではない。現在に於ては彼等は兎に角世界の勢力である、表面上の支配者である。もしかゝる状態にして永久に續くものならんには、この譬喩は確かに當らない、加之、惡者がいつまでも神に

敵しつゝ、尙其勢力を維持し得るが如きは神の支配し給ふ宇宙の大秩序に關する根本的問題である勿論神は彼等凡てを救に入らしめんが爲めに人の思に過ぐる幾多の手段を取り給ふ。乍併其れにも拘らず彼等が頑としてその心を碎かず却てキリストの聖名に對して決定的反抗の態度を取るに至らば如何。神は實に彼等の爲に泣き給ふであらう而も如何せん「他の者によりては救を得ることなし、天の下には我等の頼りて救はるべき他の名を人に賜ひし事なければなり」(行律四)キリストの十字架の中に神の愛の凡てが籠つて居るのである。故に之を受けざる者を如何ともすることが出来ない。贖ひを信受せざる者は滅亡を免れない。これ十字架が唯一の救の途なるより起る當然の結果である。實に已むを得ない。愛なる神はいつか一度び恐るべき審判を以て斷乎として惡者に臨み給ふのである。其時よ彼等の立場の遺憾なく曝露

して其運命の明白に定まるは「主イエス楯の中にその能力の御使たちと共に天より顯はれ、神を知らぬ者と我等の主イエスの福音に服はぬ者に報をなし給ふ時、かゝる者共は主の顔と其能力の榮光とを離れて限なき滅亡の刑罰を受くべし」(サロニケ四の二)。其時大なる力は天より殺到して文明を撃ち自然を撃ち人を撃ちて何者の之に抗するをも許さないであらう。其時惡者はその握れる最後の「一物をも悉く奪ひ去られて頼るに者なく立つに所なく心は狂ひ身は滅びて終るであらう」。惡しき人は風の吹き去る批露の如し。されば彼等は審判に堪へず。然り、文字通りに然うである。是に於てか彼等の不幸も亦徹底的絶對的である。

此の大なる世界的審判は必ず地に臨む。其時義しき者は如何にしてありや、如何にして之を免るか。最後の患難よりの基督者の脱出、これは信仰生活上最も光輝ある挿話の一である。彼等は患難

の到るに先だち、生けるも死ぬるも、共に其身は朽ちざるものに化せられて、暫く「雲のうちに取去られ、空中にて主を迎へ、かくていつ迄も主と共に居る」のである(前テサロニ。即ちキリストを中心として、復活又は榮化したる凡ての基督者の大聖會が天上に於て開かるゝのである。唯その莊嚴なる會び——「義しき者の會ひ」の美はしきよ、貴さよ。彼等は茲に目の當り榮光の主と見え、又預言者使徒殉教者改革者其他の聖徒等と面を合せ又凡ての愛する兄弟姉妹等と再會して、心ゆくばかり讚美と感謝とを獻ぐるであらう。彼等は感謝のあまりに、賜はりし己の冠冕を御座の前に投げ出して、偉大なる讚美の歌を唱ふるといふ(黙示の二)。そは人類の聖會中の最も豊くして福ひなるものである。然るに「惡しき者は義しき者の會ひに立つことを得ざるなり」かゝる聖會に立つを得ざる其事が大なる誼ひたらざるを得ない。

そはエホバは義しき者の途を知り給ふ、されど惡しき者の途は被ひん。

何故に義しき者—神との關係の義しき者—罪を惡みエホバの法を受する者はいくも福ひなのであるか。曰くエホバ彼等の途を知り給ふからである。彼等の前途に就てエホバ自ら責任を負ひ給ふからである。エホバはすべての人を愛して其聖子を彼等の爲に付し給うた。而してたゞ彼を受けよ信ぜよと促し給ふ。而して彼を受け彼を信する者には何の功もなくして神の子たるの權を與へ、其の永遠の運命に就て自ら責任を負ひ給ふのである。かゝる者は自己の運命を父なる神の聖手に一任し奉つたのである。義しき者の生涯は全く父の司り給ふがまゝである。然らば父は如何に之を司り給ふか。すべて父たる者は其子を己が子たるに適はしく待はざるを得ない。神は神らしく責任を盡さずしては已み給はない。即ち彼が聖子キリストを扱

ひ給ひし途、之が又彼の凡ての基督者を扱ひ給ふ途である。神は凡ての基督者を終にキリストに背たる者たらしむるまで其罪手を休め給はないのである。「神は預じめ知り給ふ者を御子の像に象らせんと預じめ定め給へり」(コリ二九)。是に於てか基督者の爲には「凡ての事相働きて益となる」のみならず、キリストと共に世嗣として限なき榮光を受くべき未來の生涯が彼等を待ちつゝあるのである。エホバは彼等の途を預じめ悉く知りて必ず之を實現し給ふのである。

之に反して悪しき者の途に就てはエホバ其責任を負ひ給はない。彼等はエホバの熱愛を受けないのである。彼等はエホバの凡ての申出を拒絶してその子たるを肯じないのである。彼等は其前に救の途を備へらるゝに拘らず却て足を轉じて他に向ふのである。禍ひなるかな、かくて何處に向はんとするのであるか。途は二のみ、救ひに非ずんば

滅びである。自ら故意に前者を棄て、後者を選ぶ。之を如何ともすることが出来ない。彼等の爲に神は憂へ基督者は泣きつゝある。主は一人の亡ぶるをも望み給はず、凡ての人の悔改に至らんことを望みて彼等を永く忍び給ふ。また「我に大なる憂あること、心に絶えざる痛みあること」を我が良心も聖靈によりて證す。もし我が兄弟我が骨肉の爲にならんには、我自ら詛はれてキリストに棄てらるゝも亦願ふ所なり。「嗚呼この民の罪は大なる罪なり……されどかなは、彼等の罪を赦し給へ。然せずば願はくは汝の書き記し給へる書の中より我名を抹去り給へ」斯の如きが眞の基督者の聲である。而してかゝる切なる祈は今も人の知らざる所にて日夜繰返されつゝあるのである。然るにも拘らずなほ冷然として其背を向け殊更に滅亡の途に進む者は誰であるか。

自然論

羅馬書第八章一九—二二節

それ造られたる者は切に慕ひて神の子たちの現はれんことを待つ。造られたる者の望みに慰せしは己が罪によるにあらず、望みして之に服せしめ給はし者による。それは造られたる者自ら滅亡の候たる狀より解かれて、神の子たちの光榮の自由に入るべければなり。何となれば我等は知る、すべて造られたる者の今に至るまで共に嘆き共に苦むことなり。

ナザレのイエスが然の親しき友たりしは人のよく知るごころである。彼には野の花も空の鳥も限なき真理の象徴であつた。預言者イザヤ、エレミヤ、改革者ルーテル、彼等も亦みな一面に於て偉大なる自然詩人であつた。すべて神を愛する者はまた自然を愛する。何となれば自然は神の心を籠め給へる聖業であるからである。すべて人生の深き觀察者は又自然の同情者である。何となれば人生と自然とは其生命の根底に於て相通ふ所があ

り、從て同じ運命が彼と此との上に懸つて居るからである。

使徒パウロは自然に就て語るに甚だ稀れであつた。故に或る有名な記者はパウロの自然觀に就て次の如き言を爲して居る「單に其人の著作より判斷してパウロの如く外界の美に動かされなかつた記者も少い。彼は幾度びか地中海の青波に浮び美しき希臘諸島の影を望みたるに拘らず、また幾度びか松林鬱蒼たる小亞細亞の山峽を往來し、アイダ、オリムパス、バルナツナス諸山の雄姿を仰ぎたるに拘らず、また小兒の折屐々故山の流の畔を逍遙ひその岩角に堰きては瀑の如くに轟く所を見たるに拘らず、彼のたましひは餘に深く道德的心靈的真理に没頭し居たるため、彼はその凡ての書翰中一言も自然美に就て語る所がない。僅にルステラに於ける彼の演説中の一節(一七)を除いては、パウロが自然に對する聊かの感受性をす

ら有したる事を表はすべき片言隻句をも見出すことが出来ない」と(フアロウ、第二卷)。併し乍ら此種の批評家に對して大使徒を辯護せんが爲には羅馬書註解の權威たるゴデーの鋭き一語を以て「足りる。曰く、斯く言ふ人(フアロウを指して云ふ、彼も亦)は多分羅馬書第八章を讀んだことがないのであらう」と。若し自然に對する最も同情深き聲、自然美を其最高の理想に於て見たる聲、自然の心の最も深き所に自己を没入したる聲が會て記録に上つたとするならば、それは疑もなく羅馬書第八章十九乃至二十二節である。

パウロは茲に「造られたる者」といふ。その原語 *τίμιον* は或は造化の行爲或は被造物の全體又は其一部を意味する。此場合に於ては被造物中基督者(二三) 其他の人類(九、九) 及び天使又は惡魔等(二〇)を除きたる生物無生物の全體即ち所謂「自然」の謂である。パウロは羅馬書第八章に

も自己を偽ることが出来なかつた。大自然はその赤裸の姿を披いて残りなく彼の眼底に投じた。かくてアルツアルスとブライアントとの詩の及ばざる所をパウロは聲高く歌ひ出でた。

人は言ふ、自然と人とは最も著るしき對照である。彼に眞實がある、調和がある、自由がある。此に虚無がある、混亂がある、束縛がある。完全は彼に在りて不完全は此に在る。美しきは彼であつて醜きは此である。人の缺陷は悉く自然に於て充さる。自然の中に神の聲あり、人の中に惡魔の嘯きがあると。何人も之等の語に共鳴するを禁じ得ないであらう。而して勿論その中に眞理がないではない。併しながらパウロの自然觀は甚だしく此普通の思想と異なる所があつた。彼は明白に言つた「造られたる者は虚無に服せり」と。虚無とはすべて恩寵と眞實との源なる神を離れたるの状態である。造られたる者即ち山と水と花と星とを

於て神の子たる者の莊大窮りなき未來の榮光を描かんとするに當り、この榮光に參與して之が背景を供すべき「自然」の現在と未來とに對し深き同情の一瞥を與へざるを得なかつたのである。

事物の正しき觀察はまづ之を愛するにある、次に之を絶對者との關係に於て取扱ふにある。自然に對するパウロの態度はそれであつた。彼は必ずしも多島海の波とタウラスの峯とを讀へなかつた。自然は必ずしもその小き部分を以て又はその表面の姿を以て彼の心に訴へなかつた。併しながら彼は神の造りし大自然其ものを見た。彼は其中心に喰ひ入るばかりの同情を以て之に對した。また其姿を神との關係に照して見た。彼は自然の爲に己が心腸を琴としてその無聲の叫びを之に響かしたのである(六、二二)。又自ら永遠の立場に立ちて自然美の如何にして完成すべきかを豫見し憧憬したのである。熱愛者パウロ！彼の前に自然は少し

以て彩られたるかのみはしき大自然は實は神に咒はれたる者である。彼は斷言した。こは餘りに大膽なる言ひ方ではないか。事實が果して之を裏書するか。そは鬼に角として、注意すべきは之れ獨りパウロの觀察たるに止まらず、舊新約を通じて現はるゝ一貫せる聖書的自然觀なる事である。聖書は決して自然と人とを切り離して取扱はない。聖書にありては自然はその創造の始より人と離るべからざる關係に於て置かれた。自然の造られたる目的の一は人の生活を完からしめんが爲であつた。自然は環境にして人は中心であつた。自然は從者にして人は主者であつた。靈と物とより成る人は自ら神と自然との連鎖たる地位に立つたのである。自然を司るべき者は人にして、人を飾るべき者は自然であつた。人は自然の頭にして自然は人の誇りであつた。斯くも密接なる關係を以て始まりし

が故に二者はまた共同の歴史を形成せざるを得ない。神は自然をして人の運命に従はしめ給ふ。主たる人の上に臨む事はまた従たる自然の上にも臨む。中心の波瀾は自ら環境にまで及ぶ。人一度び神の前に罪を犯して、自然も亦大なる耻辱を招いたのである。人、神との結合より墮ちて、自然も亦神より誚はれたのである。例へば若き芽の碎かれて枝全體の凋むが如し。かくて虚無に服せし者は獨り人のみではなかつた、罪なき自然も亦其時より虚無に服した。調和と自由とは人に失せて、混乱と束縛とは自然にも臨んだ。缺陷は人にあり又自然にある。然り美しく見ゆる自然の根底に實は大なる缺陷がある。今や不完全なる者は人のみではない。大自然そのものが神の前に甚だ憐むべき状態に於てあるのである。——斯の如きが聖書の自然觀の一部にして又パウロのそれである。

事實は果して如何。人と自然との或種の連帶關

るごいふ。誰かこの見易き事實を疑ふものがあらうか「試みに從來たゞ野生の草木の自然に繁茂するのみなりし處女的森林又は原野を取りて見よ。茲に種を播かんご欲してその樹木を伐採しその下草を刈取らんか、忽ちあらゆる種類の忌むべき臭き雜草や棘ある蕁麻の類が生え生づるであらう。之を除けば除くに從ひて又しても前の如くに勢よく生ゆるであらう。かゝる所に良き種を下すとも其發育は不可能である。げに土の誚と闘はんが爲には最も勤勉なる勞力を必要とする。同じやうに多年適當に耕作せられたる一劃の土地も、若し暫くそのまゝに放任せられんには無數の硬き雜草や荆棘などが尺寸の餘地もなく之を占領するであらう。すべて之等の惡しき種は抑も何處から來たのであるらうか。土は正しく墮落したる人心と同様である——汚れて居るのである。恰も人の心が之を注意して開發するに非ざればいかに好き境遇にあ

係は生物學者も亦之を認むる所である。彼等は曰ふ「凡ての生命は同一である。同じ源泉より出發し、同じ道程を取つて進み、同じ終局に歸着する。人の生命も畢竟其の根底は自然の中にある」と。而して人の墮落に伴ふ自然の敗壞に至ては更に顯著である。聖書の傳ふる所によれば人の罪を犯すやまづ誚はれたるものは土であつた。曰ふ「又アダムに言ひ給ひけるは、汝その妻の言を聽きて我が汝に命じて食ふべからずと言ひたる樹の果を食ひしによりて土は汝の爲めに誚はる。汝は一生の間勞苦して其れより食を得ん。土は荆棘と蒺藜とを汝の爲に生ずべし。……汝は面に汗して食物を食はん」と。即ち人をして勞苦せしめんが爲に誚はまづ食物を産すべき土の上に落ちたのである。其時以降土は樂園に於けるが如き豊かなる生産力を失ひて却て荆棘と蒺藜とを生ずべく、人は額に汗して勞苦するに非ざれば食物を獲る能はざるに至

るごも十誡の凡ての罪を生むが如きである」(F. C. 18)

人のみな知る所である。何故に人の勞力を増加するに拘らず土地は之に酬むないのであるか。また何故に廣袤數百萬又は數十萬方哩に及ぶサハラ、ゴビ等の大沙漠が空しく地上の彼方此方に横はつて居るのであるか。かゝる現象は地の創造の當初に於ては見る能はざりしものであつた。人、神にそむきてより土は人の爲に誚はれたのである。貧しくして汚れたる土、衣の如くに古びゆく地、それは確かに誚はれて居る、虚無に服して居る。併しながら誚はれしものは獨り狭き意義に於ける土のみではなかつた。人に従たる大自然そのものが悉く虚無に服せしめられたのである。見よ植物界の絶えざる苦闘を。その發芽より結實に至る迄の各階梯に於て幾多の敵と戦ひ之に打勝つに非ざれば植物は其生を完うすることが出來ない。各

種の害蟲は根を切り葉を噛み皮下に潜伏し花底に産卵しあらゆる隙を狙うて之を枯らしめんとする。加ふるに天候の不順なるあり、旱魃、烈風、降霜汎濫等の諸害交々襲ひ來りて、多くの愛すべき草木をうち斃すのである。また目を轉じて動物界に向けんか、其處には更に恐るべき不斷の戦争の行はるゝを見る。鋭き牙と研ぎ磨かれたる爪とは至る所に出沒して、襲撃、掠奪、格闘、流血、食肉等の慘劇が日々に繰返されつゝある。即ち陸には狼は羊を襲ひ獅子は鹿を裂き毒蛇は兔を噛み、空には鷲と鷹とは小禽を捉へて貪り食ひ、水には鮫と鰐とは小魚を呑んで樂む。誠に強者の専横なる跋扈である、弱者の悲惨なる犠牲である。されば猜疑逃奔は何時しか多くの動物の習性となつて了つた。彼等は小やかなる物音にすら直に耳を敏て身を構へて戰慄しながら或は岩陰の穴へと馳せ去り或は森の茂みへと飛び往くのである。平和らしき

山と海との装ひの下に深大なる不安と激烈なる恐怖とが充ち満ちて居る。かゝる不完全の世界をしも自然てふ美名の下に漫然として讚美せんとする者は誰であるか。自然を讚美せよ、されども先づ之を愛せよ。愛は皮相に満足することが出来ない、自然の根底に大なる缺陷がある。自然は諷はれて居る、自然は確かに虚無に服して居る。

バウロは大自然の虚無を見た。彼の熱き同情は凡ての造られたる者に向て傾注せられた。而して世に同情者の耳にのみ聞ゆる衷心の聲がある。大自然の衷心の聲、そんなものが果してあるか。無心の自然に何の聲ぞ。斯く疑ふ者は或は學者或は實際家或は宗教家であるにもせよ、少くとも彼等は自然の同情者ではない。自然は彼等の前に沈黙を守るであらう。併し乍ら同情者に向て自然は訴へる、虚無に服せる憐むべき自然はその衷心に漲る無量の感慨を潮の如くに注いで彼女の同情者に

服しつゝも虚無に堪へざるの歎き、敗壞に縛られつゝも敗壞を脱れんとする苦み之れである。「我れ屢々自然が哭き悲みつゝ、我に何物をか求むるを感じぬ。その求むる所の果して何物なるかを解せざるはわが身に、む痛みなり」と詩人ゲーテは曰つた。「いとも麗かなる春の日、自然はその艶美の限りを顯はす時、我等の心之に酔はされつゝも尙苦がき悲哀の毒をも吸ふに非ずや」と自然哲學者シェリングは言つた。深き自然の觀察者は詩人又は哲學者ならずとも皆之を知る。故にバウロは彼等を代表して言うたのである。「我等は知る、すべて造られたる者の今に至るまで共に歎き共に苦むことを」と。自然は一度び虚無に服せしめられてより今に至る迄斷えず歎き苦みつゝある、野も山も樹も草も禽も獸も「地をそこに充つるもの世界も其中に住む者」はみな共に聲を合せて。

向て之を訴へる。誰ぞ自然を以て無心となす者は。自然の重要な構成者は動物である。中天に飛んで聲の限りに囀り交はず鳥も、重き靴の下に呻吟し長鳴する牛も、みな自然の一員である。而して彼等に由りて代表せらるゝ精神は亦植物の中に動いて居る。日蔭にありて光を慕ふ一茎の草にだに機械的作用と比すべからざる或る心的衝動を認め得るではないか。而して又之等有機體の生活と離るべからざる關係にある凡ての無生物にも或種の本能なきを誰か斷言し得やう。然り、山にも海にも深き欲求がある。路傍に横はる一個の石塊すら均しく大自然の一員として天地に漲る無聲の叫びに響應し共鳴しつゝあるのである。すべての自然の同情者は之を感得した。彼等は自然の美を讚美するのみを以て已むことが出来なかつた。彼等の目は外なる装を透して内なる心に觸れた。自然の心に言ひかたき歎きがある、苦みがある。虚無に

服しつゝも虚無に堪へざるの歎き、敗壞に縛られつゝも敗壞を脱れんとする苦み之れである。「我れ屢々自然が哭き悲みつゝ、我に何物をか求むるを感じぬ。その求むる所の果して何物なるかを解せざるはわが身に、む痛みなり」と詩人ゲーテは曰つた。「いとも麗かなる春の日、自然はその艶美の限りを顯はす時、我等の心之に酔はされつゝも尙苦がき悲哀の毒をも吸ふに非ずや」と自然哲學者シェリングは言つた。深き自然の觀察者は詩人又は哲學者ならずとも皆之を知る。故にバウロは彼等を代表して言うたのである。「我等は知る、すべて造られたる者の今に至るまで共に歎き共に苦むことを」と。自然は一度び虚無に服せしめられてより今に至る迄斷えず歎き苦みつゝある、野も山も樹も草も禽も獸も「地をそこに充つるもの世界も其中に住む者」はみな共に聲を合せて。

目ある者は見よ、耳ある者は聴け。これ宇宙に充つる大なる事實である。パウロはすべての自然の同情者と共に之を見之を聴いた。併し彼はたゞに同情者として隠れたる事實に觸るゝのみではなかつた。彼は又基督者としてその事實の根本的意義を捉へざるを得なかつた。自然の虚無と煩悶とは神の目にありて如何なる意義を有するか。パウロは之を探り之を解した。彼は自然を愛したる上に之を神との關係に照して見たのである。此立場に立たずして詩人も哲學者も未だ自然を解したといふことが出来ない。誠に詩人ゲーテの解せざりし所を使徒パウロは明白に覺つた。自然は虚無に服して居る、しかし此儘にして滅び行くのではない。造られたる者は今に至るまで歎き苦みつゝある、しかし其聲は決して空しく消ゆるのではない。虚無に服せるその事、煩悶しつゝある其事の中に深き意義がある。

神の前に横たはつた「神その造りたる凡ての物を見給ひけるに甚だ善かりき。……即ち其造りたる工を竣へて七日に安息み給へり」。然るに見よ、偉大なる傑作は突如としてその中心より破壊し始めたのである。之に應じて聖なる作者はやをら起ち上つた。彼の安息は破れその満面のはゝえみは消えた。彼は今しも聖手を舉げて、成りしばかりの苦心の作品に對し、其環境たる部分を自ら撃たんとしつゝある。而もその熱涙を宿せる瞳の中には更に新なる理想の輝けるを見る。彼に、言ふべからざる失望の痛みがあつた。同時に新しき希望の慰めがあつた。神は此時己が獨子を犠牲にして、失はれたる人と自然とを回復せん事を決心し給うた。人類の救贖と萬物の復興、この貴き希望を以て、神は敢て自然を毀ち給うたのである。故に造られたる者の虚無に服せし世事の中に、既に無限の希望がある。而してこれ神の備へ給ひし所なるが故に

「造られたる者の虚無に服せしは己が願によるに非ず、望をもて之に服せしめ給ひし者による」。自然に罪なし。自由の意思を賦與せられざりし彼女の自ら求めて神に背くべくもない。造られたる者の虚無に服せしは即ち之に服せしめられたのである。神は人の罪の故に己むを得ずして自然を誼ひ給うた。素より彼女をして遂に滅亡に終らしめんが爲ではない。彼女を支配すべき人を辱めんが爲である。故に人にして若し罪より救はれんか、彼女も亦全く誼の束縛より解放せられねばならぬ。人の罪を犯すや否や直に救贖の途を備へ給へる神は、自然を誼ふに先だちて既にその復興を豫期し給うた。彼は「望を以て」自然を虚無に服せしめ給うたのである。憶ふ其時造物者の胸、溢れし感慨(もし斯く言ふ)の如何ばかりなりしかを。造化の事全く終りて幾許もなき頃である。天地を環境とし人を中心としたる彼の偉大なる傑作はいみじくも

必ず實現すべき希望たるは言ふ迄もない。

毀たれし自然は爾來今に至るまで斷えず煩悶しつゝある。虚無に服しながら虚無に堪へざるの煩悶、即ち新なる状態に移らんとする欲求の聲である(共に「苦みと譯せられし原語 *amara* は産みの苦みを意味する)。その充さるべき日の何時なるやを知らず、却て虚無の状態は益々甚だしからんとするの微候あるに拘らず、自然は暫くもその煩悶を廢めない。げに熱烈にして執拗なる欲求なるかな。自然も亦アブラハムの如く「望むべくもあらぬ時になほ望み」て、欲求を續けつゝあるのである。抑も斯の如きは果して空しき望みに過ぎぬであらうか。勿論欲求必ずしも確實なる希望を意味しない。否、空しきものにして墮落せる人類の欲求の如きはない。併し乍ら罪なき自然の衷心の聲は純粹である正直である。こは或る意味に於てなほ靈の聲の如く一種の預言的性質を有する。自

然れは全く望みなきものを欲求しない。その數千年に亘りて斷えざる欲求は、何時か實現すべき希望の反映である。思ふに神は自然を虚無に服せしめんとするに當り、その復興の希望を彼女に暗示し給うたのであらう。或は彼女の欲求そのものが素々神の植を付け給ひしものであらう。何れにせよ、造られたる者の歎き苦みの中に確實なる希望の預言がある。

希望、自然の前途に横たはる確實なる希望、それは果して如何なる希望ぞ—それは造られたる者自ら滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光榮の自由に入るべければなり。僕(奴隷)より自由へ—滅亡より光榮へ—然り神の子等の光榮へ—貧しくして汚れたる土と、鬭争又は荒廢に苦める諸生物とは、共にその囚はれたる状態—滅びゆく現在の状態より解放せられて、自由の状態—新しき光榮を被せられたる状態へと移るであらう。即ち

を合せて共に永遠の讃歌を唱ふる優秀なる伴侶がある。神の子—贖はれたる人—キリストに似たる光榮を被せられたる聖徒等がそれである。自然は彼等の隨從者として彼等の光榮に參與するのである。之れ始に彼等の罪の故に誼はれたる自然の當然に受くべき特權である。又彼等が其教を成就せられて永遠の生活に入る時、之にふさはしき環境を提供して以て彼等の生活を全からしめん事は自然の最後の使命である。故に自然はたゞに自然として完成せらるゝのみではない。更に一段優秀なる神の子等の受くべき恩寵に自ら參與する事を許さる。即ち曰ふ「神の子等の光榮の自由に入る」と。噫、誼はれたる今の天地は何時かキリストの光を以て蔽はれ燦然として之を反射するに至るであらう。その限なき莊美に比しては、今の地中海の青波も小亞細亞の綠蔭も數ふるに足りないパウロの目に映じたる自然は此に非ずして彼であ

全地は化して最も豊かなる園となり、凡ての植物は限なき生氣に充ちて榮え、動物界にも亦貴き平和が遍く行き渡るであらう。

荒野と潤ひなき地とは樂み、沙漠は喜びて香紅の花の如くに咲き輝かん、風に吹き舞きて喜び且喜び且歌ひ、レバノンンの榮々カマルメル及びシヤロンの美しきを得ん。彼等はエホバの榮を見我等の神の美しきを見るべし。……それは荒野に水湧き出で沙漠に川流るべければなり。やけたる沙は池となり、潤ひなき地は水の源となり、野犬の吠したる住所は蘆葦の繁り合ふ所となるべし(イザヤ三十五の一、二、六、七)。

山と園とは聲を放ちてみまへに歌ひ、野にある樹はみな手をうたん。松樹は荊に代りて生え、刺楸は棘に代りて生ゆべし。こはエホバの頌美となり、またとこへの微となりて絶ゆることなからん(同五五の二二、一三)。

狼は小羊と共に宿り、豹は小山羊と共に臥し、小獅子、鹿えたる家畜共に居りて小き童子に辱かれん(同一一の六)。

かくて自然の虚無は悉く癒され、天地は莊美の極に達し、萬物の歎き苦みの聲は消え果て、絶大な歡喜の歌が之に代るであらう。而もそれは自然の獨唱ではない。彼女の側に立ちて之を導きつゝ、聲つた。パウロは自然の理想を見て其心躍つた。而してこの高遠なる理想は何時か必ず事實となりて現はるゝのである。

神の子等の光榮に參與するといふ、この理想の實現は何時であるか。神の子等は今はなほ光榮を被せられて居ない。彼等は既に新しき生命に入りて、神との關係に於ては恩寵に恩寵を加へらると雖も、此世の立場より見ては、キリストと共に十字架につけられたる死者に外ならない。彼等は無視せられ嫌惡せられ排斥せられつゝある。併しなからやがて或る驚くべき時が来るであらう。即ち終のラッパ忽焉として鳴り響かん時、イエスキリストその榮光の體を以て我等の前に顯はれ給はんとす時、其時神の子等も亦みな榮光の姿に化せられて大なる權威を帯びて顯現するのである。汝等は死にたる者にして、其生命はキリストと共に神の中に隠れ在ればなり。我等の生命なるキリストの現

はれ給ふ時、汝等も之と共に榮光の中に現はれん
(三の三四)。而して其時こそまた自然の理想の實現
 すべき時である。自然は神の子等の顯現を俟ちて
 初めて完成せしめらる。此故に自然の待望は神の
 子等の榮光の妻に於ける顯現にある。それ造られ
 たる者は切に慕ひて、神の子たちの現はれん事を
 待つ「切に慕ひて」と譯せられたる *apokandotia*
 の語義は頭を擧げて (*Kant*) 遙かに (*also*) 窺ふ
 (*John*) の意である。「いかに塑造的の表現よ。彫
 刻の天才はこの一字の希臘語より希望の像を彫む
 てあらう」(ア)。見よ大自然はその頭を擧げて
 「神の子等は未だ顯れずや」とひたすら窺ひ望み
 つゝある。天地の思慕、萬物の待望は一に我等人
 類の救贖に集中して居るのである。

「地球は單に數學的法則の下に支配せらるゝ死物
 ではない、今日まで既に幾多の自己變形を経過し
 今なほ絶えざる進歩の途上にある生活體である」

彼の信仰的立場

彼は自己に就て語る事を少しも好まない。出來
 るならばその見苦しさを免れたく思ふ。併しな
 がら兎に角一個の公人として自己の信仰的立場を
 一應明かにするの必要だけは彼も之を認めて居
 る。

彼の立場を表はすに最も簡單にして且明白なる
 語を選ぶならば「聖書本位」といふが其れであら
 う。舊新約聖書を以て彼は己が立つべき唯一の根
 據と爲すものである。但し彼は決して聖書の權威
 を外より吹き込まれて何でも之には従はざるべか
 らずと定めて懸かつて居るのでは無い。否、決し
 てさうではない。先づ「何故に」との疑問がいつ
 でも彼の心の深き所に起る。而して此自己内心の
 疑問に對し *inelligible* なる解答が與へられな
 い限りは、彼は何人が如何なる真理をも彼に薦む

とは地質學の唱ふる所である。然らばその進歩の
 終局に於ては遙に秀逸なる變形を期待せねばなら
 ぬ。學者のこの提言は偶々聖書の教へと暗合する
 所がある。聖書にありては自然の生命は希望にあ
 る、萬物はみな或る光榮ある未來を望んで動きつ
 つゝある。山に希望あり、海に希望あり、囀る鳥に希
 望あり、散り行く花に希望あり、新緑に希望あり、
 紅葉に希望あり、旭光に希望あり、夕陽に希望あ
 り。誠に宇宙其ものが一の大なる希望である。基
 督者は茲に現はれんとする新しき宇宙を豫見し憧
 憬する。彼の自然觀は純然たる希望的自然觀であ
 る。而して彼はその希望の實現が自己の完き救贖
 に懸る事を知るが故に、彼の自然に對する同情は
 彌が上に深きものたらざるを得ない。

るとも之れを我がものとする事が出來ないのであ
 る。即ちすべて自己の良心に觸れて其處に或確か
 なる反響を見出すまでは、たゞへ如何に尊敬すべ
 き人の奉ずる真理と雖も之を信する事の出來ない
 のが彼の性格である。故に或人は彼を評して餘り
 に疑深しとか、又は彼の信仰が小兒の如き單純さ
 を有しないとかいふ。或はさうであるかも知れな
 い。併しながら善かれ悪しかれ、盲從的信仰を抱
 くことは彼には事實上出來ないのである。彼が自
 己の立場を稱して「聖書本位」と言ふ時も、彼は
 決して聖書に關する盲信を意味して居るのではな
 い。

彼は初め聖書に對しては何の負ふ所なき他人と
 して之に臨んだ。故に彼の態度は自ら批評的であ
 った。もし何等かの感情が彼に先入して居つたと
 するならば、それは寧ろ偏見であつた。然るにも
 拘らず、聖書は遂に彼の全心を占領して了つたの

である。彼は聖書に於て始めて罪の如何に嚴肅なる實在であるかを知つた。その處分は實に容易なる問題ではなくして、確かに天地の破壊をも賭すべきほどの重大事であることを知つた。従つて罪人が神と義しき關係に歸る事の困難否その不可能を知つた。而も神自ら人の思惟に餘る犠牲を拂つて此事を可能且最も容易ならしめ給ひし事を知つた。彼はかくて心腸に浸み渡るまでに神の愛を味はしめられた。加之神の救が此處に止まらずして身體及び萬物の完成にまでも及ぶ事を知るに至つて彼の聖書に對する信頼は其絶頂に達したのである。何となれば彼の靈に訴へて其反響を喚び起すべき一切の問題は茲に遺憾なく聖書によつて啓示せられたからである。聖書は何者の紹介状をも携ふることなく直接彼の心の戸を叩いて、彼をして戸を開きて迎ふるの餘儀なきに至らしめた。彼が聖書を信頼するは決して人の證明を信頼するが故

ではない。凡ての人をして聖書を棄てしめよ。然れども彼はたゞ獨り聖書を己が胸に抱きて離さないであらう。聖書は今に彼に取りて實に「わが書」である。

而して聖書に對する信頼は勿論その全體に對する信頼である。聖書舊新約六十六卷、前後千五百年に亘り、數十人の記者によりて、各々特殊の場所と境遇とに於て記録せられしもの、然るにその目的その精神その主題に於ては首尾一貫、整然として一大有機的組織を成し、全體を以て間然する所なく永遠の眞理を傳ふるは、誠に驚歎すべき偉觀である。即ち天地の創造より新天地の出現に至るまで、人の救贖と萬物の完成とに關する神の經綸は、イエスキリストを其變らざる中心として、秩序正しく、彼此相補ひ、最も人の理會に適當なる態を以て我等の前に提供せらるゝのである。誰かその背後に一の大なる手の動けるを拒み得る者が

あらうか。聖書は大能者を著者とする完全なる一書である。故に之に加ふべからず之より抜くべからずまた之を分つべからず。其片言隻句と雖も、之を其在るべき場所に置き、聖書全體の精神を以て之を解釋する時は、みな謬なき神の言である。聖書は又人の靈に對する神よりの直接の音信として唯一のものである。何となれば「キリストに就て證せ」ざるものにして人の救を示すものあるなく、又すべてキリストによる救を傳ふるものはみな聖書より出づるものに外ならぬからである。全體として謬なき唯一の神の書、彼は聖書を斯の如くに見て絶對に之を信頼する。此處に彼は凡ての問題の解決の根據を置く。天然又は自己の實驗又は其他の方法に由て啓示せらるゝ眞理も一度び聖書の光を以て之を照すに非ざれば彼は之を受けない。時代の思想が如何に變化するも彼は少しも惑はずして唯永遠に變らざる聖書に頼る。「人はみ

な草なり。その榮はすべて野の花の如し。草は枯れ花は萎む。されど我等の神の言は永遠に立たん」。この堅き磐の上に己が立場を置きて彼は靈的生活上實に言ひがたき安全を感じて居る。而して彼は常に思ふ、神もし人の靈を救ひ給ふならばかゝる明白なる具體的の音信——人の通常の言語を以て綴られ全體として謬なき唯一の書——を與へて以て躊躇する所なく之に頼らしめ給ふが如きは最も合理的なる處置である。

斯の如く彼の立場は全然聖書本位である。然らば彼は所謂正統派 (orthodox) に屬するものであらうか。若し此語を本來の意味に解釋するならば、彼は確かにその一人である。併し乍ら歴史的の意味に於ては、彼は果して此名稱を以て呼ばるべき者であるかどうか甚だ疑はしい。少くとも正統派の教會に重んぜらるゝ、神學者救役者若くは平信徒の言説行動等にして彼の其鳴を促す

人は家にイエスは山に

かくて各々が家に往けり。
されどイエスはオリブの山に往けり。

——ヨハネの五三、八の一——

何人の筆ぞ、無難作なる一抹のスケッチの中に斯くも大なる真理を現はせるは。宮に於ける一日の活劇は終りて、人みな其の歸るべき所に歸り往いた。但し各々は己が家に、イエスは獨りオリブの山に。誠に彼には枕する所が無かつたのである。併し乍ら此世の家に代へて、彼には靜かなる山があつた。オリブの樹蔭、エルサレムの街を眼下に望む所、そこに彼は凡ての人を離れ一切の世の事を棄て、たと深く深く父と交はつたのである。貴きかな山上に於けるイエスの夜の生活。何人もその消息を傳へずと雖も、我等は之を想像するに難くない。ゲツセマノ園の一夜の如き又はガラリヤに於ける變貌の出來事の如き、之を代表す

るものに非ずば暗示するものである。即ち彼はかくて屢々夜を徹して祈つたであらう。律法と詩と預言とに心より親しんだであらう。又サタンの誘ひを最も深刻に味ひて徹底的の勝利を實驗したであらう。之を要するに、それは限りなく深き内的生活であつた。人みな市井の巷にありて淺き休養を求めし間に、彼のみは夜な／＼山上直に天よりの智慧と力との最も豊なる供給に與かつたのである。イエスの偉大なる外的生活は一に此深き内的生活の發現に外ならなかつた。後者なくして決して前者は無かつたのである。神の子と雖も夜々獨り靜に父に迫りて深く其聖言を味ひ其み聲を聴くに非ずんばかの大業を成就する事は出來なかつた。我等も亦我等の山を要する。世の人をしてその家に往かしめよ。されど我等をして山に登らしめよ。深き聖書知識と深き靈的實驗我等は基督者として先づこの恩恵に與からんと欲する。

定價 (郵税共) 一冊 金貳拾錢
六冊 前金 壹圓拾五錢

振替貯金口座 十二冊 前金 貳圓貳拾錢
東京 五二四八九

大正九年五月三十日印刷
大正九年六月一日發行

編輯兼發行 藤井武
兼印刷者

發行所 舊約と新約社
東京府豊多摩郡中野町上ノ原九百四十二番地

印刷所 學園印刷所
東京府北豊島郡四ツ目町庚申塚百二十六番地